



学校だより



2026年 8月27日
横浜市立港南台第一小学校
9月号



「本気」は心を動かす

校長 本多 響

私はこの夏、バレーボールのネーションズリーグや野球の甲子園、卓球の世界大会など、スポーツをたくさん観る機会がありました。バレーボールの日本代表選手や甲子園の球児たちの姿を見ていると、涙が出ます。日本の選手が勝っても負けても涙が出ます。甲子園の高校野球などでも、直接は知らない子たちなのに涙が出ます。先日行われた港南区のスピーチコンテストで6年生の代表児童がスピーチをしている表情を見ても胸が熱くなり、涙が出ました。なぜこんなに涙が出るのか自分でも不思議に思っていました。年をとったからなのかな、涙腺がゆるんできているからなのかなといろいろと考えました。考えた中で理由が2つあるかなと思いました。

1つめの理由は、そこに出場している方々は全員「本気」だということです。当日の試合だけでなく、この舞台に立つために長い時間練習を行い、本気でその競技に向き合ってきたことが滲み出ています。「本気」で向き合っているからこそ、選手たちは勝つとうれし涙を流したり、思いっきり笑顔になったり。負けると悔し涙を流したり、次の勝利のために新たな決意をしたり。そこには凄みを感じ、心が動きます。

スピーチコンテストに出場した6年生の代表児童も、お母様から本人が家でたくさん練習をしているのということを聞いていました。自分のできる限りの力を発揮するために、何度も何度も練習したのだと思います。スピーチをしている姿から本気であることがびんびんと伝わってきて、本当に胸が熱くなりました。

2つめの理由は、私も「本気」で何かに取り組んだことがあるということです。1つ例を挙げるとすると、私は高校生の時に野球をやっていました。甲子園に行くような強い学校ではありません。でも1つでも多く勝ちたいと思い、毎日「本気」で練習していたことを今でも覚えています。強い学校ではなかったけれども、甲子園に行くような強豪校に勝ちたいと「本気」で思っていました。だから練習は自分たちでメニューを考え、自分に厳しく一切手を抜かずにやりました。だからこそ、勝ったときには思い切り笑顔でチームメイトと喜び合いましたし、負けたときには悔し涙を流しました。そのときの気持ちは30年たった今でも忘れていません。

私が経験した「本気」で取り組んだ時の気持ちと、現在の選手たちの「本気」の姿、代表児童の「本気」の姿がリンクして、自然と涙が出てしまうのではないかなと思います。ただ年をとって本当に涙腺が緩くなっていることも理由の一つなのかもしれませんが、私は「本気」で何かに取り組めることは凄いことだと思います。だからこそ心が動きます。みなさんにも「本気」で取り組んでいることはありますか？勉強だけでなく、絵を描いたり、本を読んだり。サッカーをしたり、野球をしたり。人それぞれ、やれることは無限大にありますね。どんなことでも「本気」になって取り組んだときにはじめて、やりきったという充実感を味わえるのだらうと思います。そしてそれが勝ったときの喜びや負けた悔しさにつながるのだらうと感じました。

さて夏休みが終わりました。学校が始まると、「本気」になろうと思えばできることはたくさんあるのではないのでしょうか。それはスポーツフェスティバルかもしれないし、日々の勉強かもしれません。それは今習っていることなのかもしれません。「本気」になることは何でもよいのだと思います。本気になったからこそ得られる達成感をうちの子たちにも味わってもらえるように、また9月からも頑張ろうと思います。